夢童（ゆめわらし）

菅波　茂

インドネシア・スラウェシ島洪水緊急医療支援活動

6月22日午前10時。アスカ国際クリニックでの診察中にAMDAインドネシア支部長のタンラ教授から国際電話がかかってきた。「スラウェシ島で大変な災害が発生した。正午にはインドネシア支部は救援チームを被災地に派遣する」と。

スラウェシ島にはインドネシア支部がある。ほっとけない。被害を調査した。18日から降り続いた豪雨により洪水が発生。死者は約300人。浸水被害による避難者約7500人。5月に発生したジャワ島中部地震救援活動で疲労困ぱいしていたが、AMDA本部から山上正道調整員と小堀他津子看護師の派遣を決定した。

少なからず議論があった。04年12月に発生したスマトラ沖地震・津波の死者、行方不明者は22万人以上。ジャワ島中部地震の死者は約6000人。今回のスラウェシ島の洪水による死者は比較的少ない。それでも医療チームを派遣するのか、きりがないのではないか、等々である。

AMDA多国籍医師団の派遣には①災害がアジア太平洋地域で発生②マスコミ報道がある③死者が1000人以上④現地にカウンターパートがいる⑤医療チーム派遣で効果がある――の5原則がある。今回の洪水被害は③が欠けている。小規模である。しかし原則はあくまで原則にすぎない。

最も重要視したことはインドネシアが血縁共同体社会である事実。血縁共同体社会は冠婚葬祭の社会である。冠とは成人の儀式。婚とは結婚。葬とは葬式。祭とは祖先を祭ること。結婚と葬式とどちらが大切か。ミャンマーの農村の集会で村人はいっせいに叫んだ。「葬式」と。日本人なら「結婚式」だろう。

スラウェシ島はタンラ教授とインドネシア支部の医師たちの故郷である。多くの人が洪水で被災している。派遣する基準はもはや被災者の数ではない。多くの人たちが死んでいる「葬」への参加である。血縁共同体社会では葬式に参加しない人は義理欠きとなる。友としての人間関係にひびが入ることがある。悪くすると村八分になる。

タンラ教授は自宅に日本からの派遣者2人を泊めてくれた。自宅に泊めることは家族として遇することである。最上級のもてなしである。「義理人情」という熟語がある。情とは知らない人に対する親切である。義とは知っている人に対する親切であり、そこには理由がある。義を繰り返すことによって人間関係は強固になっていく。

AMDA多国籍医師団の目的は知らない人の命を救うことである。人情である。欧米流では人道支援活動である。その動機は義理である。AMDA家族としての相互扶助である。相互扶助で難しいのは医療チームを派遣しなかった時である。何故に義を果たさなかったのか。何故に義を無視したのか。最も不信感を抱かれるのは、義を果たしたり果たさなかったりすることである。

「救える命があればどこへでも」のスローガンのエッセンスは「義理人情」である。血縁共同体社会の倫理道徳である。年月とともにAMDA多国籍医師団の参加国は増えている。活動は迅速性を増している。義理の積み重ねの成果である。結果として人情が厚くなってきている。相互扶助ネットワークの拡充である。少しずつ少しずつ。ちりも積もれば山となる。「AMDAは必ず来る」という伝説をめざして……。

（AMDA代表）

＝題字は筆者